

【初盆のしおり ～初めての精霊を向かえるお家の方へ～】

お盆の由来

お盆は、もともとはインドの古語であるサンスクリット語の「ウランバーナ (ullambana)」という言葉が、中国で漢字に音写 (孟蘭盆) されたものです。ウランバーナとは日本語に直訳すると「逆さに吊るされたような苦しみ」ですが、転じて死後に逆さ吊りにされたような大変な苦しみを受けている死者を何とかして救おうとする祭儀を意味するようになったもので、その起源について仏説「孟蘭盆経」には次のように書かれています。

お釈迦様の十大弟子で神通力第一といわれた目連尊者が、亡くなった自分の母親が今はどうなっているのだろうかと知りたくて、その神通力をもって死後の世界を見渡しました。優しくて慈悲深い母親のことだから、さぞかし良い後生を送っているのだろうと天上界から順番に探してみましたが、なかなかみつきません。募る心配の中でどうどう見つけることができたのは、餓鬼道に堕ちて暗闇の中でやせ衰え苦しんでいる母親の見るも無惨な姿でした。目連尊者が食べ物や水を母親に与えようとしませんが、その食べ物は全て炎となって燃え上がってしまい、母親の口には入りませんでした。困り果てた目連尊者はお釈迦様に泣きついて救いを請いました。お釈迦様のご教示は明快でした。

「目連よ、お前の母親はとても優しい人で、決して悪い人ではなかった。ただ、お前の母親はお前だけに優しく他の子供には優しくはなかった。お前のかわいさのあまり、罪を犯してしまったのだ。」

「目連よ、お前は自分の母親だけを救おうと、自分の神通力を用いている。なぜ、同じ苦しみを受けている多くの人々の苦しみにも目を向け耳を貸そうとしないのか。母親を救いたいと思うなら、全ての人々の苦しみを救おうという心で法会を営みなさい。」

「母親の罪は重く、神通力第一といわれるお前の力をもってしてもどうすることもできない。これを救うには、修行者たちが夏安吾 (インドで当時4月15日から聖者によって3ヶ月間行われていた修行のこと) を終える7月15日に、七世 (自分からさかのぼって七代前まで) の父母のために、百味飲食五菜を供え、十方の多くの修行僧を供養し、その力にすがるのがよかるう。」



目連尊者は夏の修行の終わる日に、多くの修行者に協力を乞い、また飢えや乾きに困っている人たちにたくさんの飲食物を施して、母と同じく苦しんでいる多くの人々のために法会を営みました。すると、目連尊者の母親をはじめ数えることもできないほどの多くの人々が皆、安樂の世界へ転生することができました。このことを知った人々は、こぞって夏の修行明けの7月15日に仏弟子を招き、万霊供養の法会を営むようになりました。

7月盆と8月盆]

これがお盆の行事の起源となり、中国では6世紀ごろから、亡くなったご先祖様を慰めるために広く行われるようになりました。日本では斉明天皇3年(657年)旧暦7月15日に、飛鳥寺(元興寺)の西に須弥山の像を作って盂蘭盆会を催したのが初めとされ、聖武天皇の天平5年(733年)からは宮廷内に盂蘭盆会の供物を管理する職も定められ、以後平安時代には主に宮中を中心として盛んに行われました(註:606年7月15日推古天皇時とも)。その後、江戸時代になると7月13~16日までを盂蘭盆会として庶民にも定着します。

このように日本のお盆は本来7月15日(旧暦)を中心に行われるものですが、現在では関東の一部を除いて8月となっています。これは明治政府がそれまで使われてきた暦(旧暦)を世界の基準に合わせて新暦に変更したことがきっかけで、その旧暦の『7月(現在の6月15日ごろ)』にこだわるか、もしくは本来の旧暦7月(現在の8月15日ごろ)の季節感を重視するかで、現在の状態になっています。

お盆の行事の流れ]

お盆の期間は、13日の入り(夕方)から16日の明け(夕方から日没ごろ)までの4日間です。ですから13日までには、お墓の掃除や「精霊棚(盆棚)」の準備をしておかなければなりません。また神戸地区では、8月7日をお盆の準備の入りの日とするお家が多く、当寺院の墓地でも回向をお勤めしています。

そして本来は13日に墓地で「迎え火」を焚き(自宅や玄関・門口で焚く地方もあります)、その迎え火を提灯に移し消えないように持ち帰り、精霊棚の口ウソクや家紋の入った提灯に火を灯します。こうして、ご先祖様の精霊をお招きします。

14・15日はご先祖様はご自宅におられますので、ご接待差し上げます。そして16日の昼までは、同じように生きている我々と同様にご接待することになっています。その後16日晩には、送り火を焚いてご先祖様を極楽浄土へお送りします。(そのため、京都五山の送り火は16日夜となっています。)

しょうれいだな
精霊棚



お盆には、仏壇以外の場所に精霊棚しょうれいだなと呼ばれる祭壇さいだんを別に設けます。精霊棚しょうれいだなを置く場所は主にお仏壇のそばに安置することが多いようです。また精霊棚は必ず左図のようにお祀りするものではありません。お家の風習等がある場合はそれに準じゆんじて下さい。

しょうれいだな
精霊棚の作り方

棚には、故人様がお好きだった食べ物などや野菜・果物、盆花をお供えして、特にキュウリの馬とナスの牛を飾ります。

精霊棚しょうれいだなの中に馬と牛をお供えするには理由があります。これはご先祖様の霊が「キュウリの馬」に乗って一刻も早くこの世に帰ってきていただき、「ナスの牛」に乗ってゆっくり、そしてたくさんのお土産みやげを持ってあの世ごらくじょうど（極楽浄土）へお戻りいただくようにとの願いを込めたものだといわれています。

また左図上部『仏様（新仏様）のお家』（用意しなくても構いません。）には、初盆供養の際は笹塔婆をお寺より用意しますので、それを位牌とします。ここには普段の年は、仏壇内の位牌を移動して置く地域もありますが神戸ではあまり見かけません。その他、必要なものは仏具屋さんで手配します。近くにない場合は、お寺にお問合せ下さい。

しょうれいだな
精霊棚を祀る期間

住職がお伺いする初盆はつぼんのお参りの際と、8月13～16日の正午ごろまでの期間まつお祀りしてあげて下さい。

なお、精霊棚しょうれいだなは初盆はつぼんに限らず、本来は毎年お盆参りぼんまいの際に用意します。

*当寺院では初盆精霊のご回向を8月16日盂蘭盆施餓鬼大法要うらぼんせがきだいほうようにて、参列者の皆様と共にご本堂でお勤めしておりますので、是非ご参詣下さい。

合掌

作成：普照院 住職